

-r/n- 語幹名詞

松浦 高志

1 はじめに

中性名詞をつくる語幹 -r/n- は単数主格・対格で -r- を用い、それ以外の格で -n- を用いる。この語幹は古くから用いられていたと考えられる。実際にヒッタイト語ではよく用いられる語幹の一つであり、いくつかの印欧語にもその痕跡が残っている¹。サンスクリット語でもいくつかの名詞が -r/n- 語幹由来である。Gotō, *Morphology*, 32–33 に述べられているものを中心に、以下で挙げる²。

2 -r/n- 語幹名詞の例

-r- 語幹と -n- 語幹の両方が残っているのが *údh-ar* (sg. nom.-acc.) 「乳房」(**h_xouh_xd^h-ér* [?]/**h_xuh_xd^h-n-*) である。ほかの曲用形には *údh-n-as* (abl.), *údh-an(-i)* (loc.), *údh-a-bhis* (pl. instr.), *údh-aḥ-su* (loc.) がある。これらのうち、*údh-ar*, *údh-aḥ-su* から新しい語幹 *údhas-* が作られている。また *áhar-* 「日, 昼」(< **h₂eĝ^h-r-*) の曲用形には *áh-ar* (sg. nom.-acc.), *áh-n-as* (gen.), *áh-ā* (pl. nom.), *áh-a-bhis* / *áh-o-bhis* (instr.) などがある。また *yakṛt-* 「肝臓」の曲用形には *yák-ṛ-t* (sg. nom.-acc.), *yak-n-ás* (abl., RV) などがある。これに対応するのは

¹ Hoffner and Melchert, *Hittite*, 124–126.

² *AiG* III.310–319 も見よ。

ギリシア語 *hēp-ar* (nom.-acc.), *hēp-at-os* (gen.) である。-at- (gen.) の t はギリシア語で新たに追加されたものと考えられる。一方 *yakrt* (nom.-acc.) に含まれる t は -krt- 「……をつくる」、-bhrt- 「……をになう」などからの類推と考えられる³。 *hēp-at-os* に含まれる t と関係があると考えられることもある⁴。ラテン語での曲用形には *iec-ur* (sg. nom.-acc.), *ioc-in-er-is* (gen.) などがある。ラテン語では一般に -in- は *-en- または *-n- に由来する。また *ioc-in-er-is* (gen.) の -er- < *-es- (rhotacism) が本来の単数属格語尾であり、-is (< *-es) はそれに加えてさらに単数属格語尾が追加されたものである。またリトアニア語 [j]ėknos (pl.) も同じ語幹を用いている。印欧祖語では *ǵekʷ-r̥ (nom.-acc.), *ǵokʷ-n-és (? gen.) と再建される。

-n- 語幹のみが残っているのが「水」である。残っている曲用形は *ud-n-ás* (sg. abl.-gen.), *ud-án / ud-án-i* (loc.), *ud-ā* (pl. nom.-acc.) である (ただし *ud-ā* < **ud-ār* と考えられる)。ヒッタイト語では *wat-ar / wāt-ar* (nom.-acc.), *witen-aš* (gen.) であり、ギリシア語では *hýd-ōr* (sg. nom.-acc.), *hýd-at-os* (gen.) である。また印欧祖語では **uód-r̥* (sg. nom.), **uéd-n̥-s / ud-n-és* (gen.), **ud-én* (loc.), 集合名詞形 (collective) **uéd-ōr* と想定されている⁵。ギリシア語の *hýd-ōr* (sg. nom.-acc.) は集合名詞形に由来する⁶。

3 svàr- 「太陽光」

svàr- 「太陽光」は、r 語幹を含む曲用形しか残されていないが、本来 -n- 語幹と交替していた痕跡が認められる⁷。まず、svàr- 「太陽光」 (< **seh₂u-*

³ Gotō, *Morphology*, 33, 54–55.

⁴ Beekes, *Introduction*², 206.

⁵ -r/n- 語幹の集合名詞形については Schindler, «-r/n» を見よ。

⁶ 希 *sk-ōr* (sg. nom.-acc.), *sk-at-ós* (gen.) 「糞便」も同様の曲用を行う。

⁷ 後藤「サッティヤ」, 29–30 に、想定される変化の過程が詳しく述べられている。

el-) は, *sūrya-* (< **suh₂l-je/o-*) 「太陽神, スーリヤ」や羅 *sōl* 「太陽」などからわかるように, もともと *-l-* 語幹であった. したがって *-r/n-* 語幹と同様に *-l/n-* 語幹も存在していたと考えられる⁸. 次に *svār* (sg. nom.-acc.) は, 『リグ・ヴェーダ』では韻律上常に *súvar* のように 2 音節で数えられる. すなわち *svār* = *súv-ār* < **sh₂uu₂él* << *sáh₂uel* < *sáh₂u₂* である. なお, この **sh₂uu₂él* << *sáh₂u₂* の類推は **sh₂(u)₂-én-s* (sg. gen.) などからの影響と考えられる⁹. ただし *ásvasyātra jānimāsyá ca svār* 「馬の出生 (起原, 本性) はここ (水中) なり, また彼の [他の出生は] 太陽なり」 (RV II.35.6a : *triṣṭubh* 韻律, 辻訳) では, *svār* と 1 音節で数えなければならず, このような箇所は『リグ・ヴェーダ』の中ではこの箇所だけである. *Gotō, Morphology*, 33 n. 96 では, これは **sván* < **sh₂u₂-én-s* (gen.) に由来すると理解されている¹⁰. *-n-* 語幹が存在していたことは古アヴェスタ語 *xvāng* (< **sh₂uu₂-én-s*, sg. gen.) などから想定することができる.

4 その他の *-r/n-* 語幹の単語

Gotō, Morphology には挙げられていないが *śák-ṛ-t* (sg. nom.), *śák-n-ás* (gen.) 「糞便」 (< **ḱok^w-r-*), *ás-ṛ-k* (sg. nom.), *as-n-ás* (gen.) 「血」 (< **h₁esh₂-r-*, ヒッタイト語 *ešḥar* (sg. nom.) / *ešnaš* (gen.), 希 *éar*, 羅 *aser*) も *-r/n-* 語幹で

⁸ 後藤「サッティヤ」, 29–30 や Fortson, *Introduction*², 123 などを見よ.

⁹ *svār-* 「太陽光」の単数属格形は *súr-as* < **súur-as* << **sh₂(u)₂-én-s* である. この **sh₂uu₂-én-s* は **sh₂u₂-én-s* に対する Lindeman 異形 (variant) である. Lindeman の法則とは, 「その前に置かれた単語の最後の音節が長母音であるとき, **Cu-*, **Ci-* で始まる単音節語は, **Cuu-*, **Cii-* となることがある」というもので, これにより生じた異形態のことを Lindeman 異形という. Lindeman 異形については Lindeman, «Sievers» を見よ.

¹⁰ Macdonell, *Reader*, 72 では *-i* を用いない処格と理解されている.

ある¹¹. 希 éar も羅 aser も古語であり, ふつうこれらを置き換えた希 haīma, 羅 sanguis の方が用いられる.

また次の二対の名詞は *-ur- / -uon- という語幹の交替が存在していたことを示唆している¹²: pár-us- (< pár-ur-)/pár-vaṇ- 「結び目, 関節」(希 peīrar 「終わり」), dhán-us- (< dhánur-)/dhán-van- 「弓」.

付録 : sarvāhṇám について

áhar- 「日, 昼」は sarvá- などと複合語をつくる時, sarvāhṇám 「昼の間中ずっと, 昼間」(MS I.8.9: 129.4–5) のように弱語幹を用い, a 語幹になる¹³. パーニニにおいては ahno 'hna etébhyaḥ 「ahna- は, 以上の単語 [が複合語の前分として用いられる場合に] ahaḥ 『日, 昼』の代置要素である」(Pā V.4.88) と述べられている¹⁴. 「以上の単語」とは sarvá-, eka-deśá-, sámkhyāta-, púnya- (V.4.87) と不変化詞 (V.4.86) のことである¹⁵.

凡例

- *A A は想定形.
- B < C B は C に由来.
- D << E 類推によって E が D に変化.
- *h_x 印欧祖語の喉音 (x = 1, 2, 3).
- *i̇ 印欧祖語の子音化した *i (サンスクリット語の y に対応).
- *k̂ 印欧祖語の無声無気硬口蓋音.

¹¹ Lanman, 'Statistical', 466; Schindler, « -r/n », 6; Puhvel, *Etymological*, s.v. sakkar.

¹² Gotō, *Morphology*, 33–34; Schindler, « -r/n », 9–10.

¹³ *AiG*, II-1.112. MS は節番号に加え, コロンの後に von Schroeder による校訂本のページ数と行数を示した.

¹⁴ Renou (tr.), *Pāṇini*, 102; Katre (tr.), *Pāṇini*, 635 などを見よ.

¹⁵ 本ノートは 2017 年 10 月 30 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習(4)」(東京大学文学部)での発表資料に若干の改稿を行ったものである.

- *k^w 印欧祖語の無声無気両唇口蓋音.
 *ŋ 印欧祖語の母音化した *n.
 *u̯ 印欧祖語の子音化した *u (サンスクリット語の v に対応).
 希 ギリシア語.
 羅 ラテン語.
 AiG Wackernagel et al., *Altindische Grammatik*.

サンスクリット語文献の略号

- MS Maitrāyaṇī Saṃhitā. Pā Pāṇini.
 RV Ṛgveda(-Saṃhitā).

参考文献

- Beekes, R. S. P., *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*², rev. M. de Vaan (Amsterdam: John Benjamins, 2011).
 Fortson, B. W., IV, *Indo-European Language and Culture: An Introduction*² (Chichester: Wiley-Blackwell, 2010).
 Gotō T., *Old Indo-Aryan Morphology and its Indo-Iranian Background* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2013).
 Hoffner, H., Jr., and Melchert, H. G., *A Grammar of the Hittite Language, Part 1, Reference Grammar* (Winona Lake: Eisenbrauns, 2008).
 Katre, S. M. (tr.), *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini* (Austin: University of Texas Press, 1987).
 Lanman, C. R., ‘A Statistical Account of Noun-inflection in the Veda’, *Journal of the American Oriental Society*, 10 (1880), 325–601.
 Lindeman, F. O., «La Loi de Sievers et le début du mot en indo-européen», *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap*, 20 (1965), 38–108.
 Macdonell, A. A. (ed.), *A Vedic Reader for Students* (Oxford: Clarendon Press, 1917).
 Puhvel, J., *Hittite Etymological Dictionary, x: Words Beginning with SA* (Berlin: De Gruyter, 2017).
 Renou, L. (tr.), *La grammaire du Pāṇini, ii: Adhyāya 5 à 8* (Paris: École française d’Extrême-Orient, 1966).

Schindler, J., « L'apophonie des thèmes indo-européens en *-r/n* », *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 70 (1975), 1–10.

von Schroeder, L. (Hg.), *Maitrāyaṇī Saṃhitā* (Leipzig: Brockhaus, 1881–86).

Wackernagel, J., Debrunner, A., et al., *Altindische Grammatik* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1896–1964).

後藤敏文「サッティヤ *satyá-* (古インドアーリヤ語「実在」) と οὐσία (古ギリシャ語「実体」) ——インドの辿った道と辿らなかった道と——」

『古典学の再構築』ニューズレター第9号 (2001), 26–40.

辻直四郎 (訳) 『リグ・ヴェーダ讃歌』 (岩波文庫, 1970).